

学力の基礎をきたえ どの子ども伸ばす研究会ニュース

NO. 358

学力研の広場

2025. 1. 10

学 力 研 発 行

常任委員長 岸本ひとみ

郵便振替 00920-9-319769

ホームページアドレス <http://gakuryoku.info/>

思い切り甘やかしてください。

子育てに「しつけ」は必要ありません。

夢のような環境の中でほうっておけば、自然に学ぶ力が備わっている子どもは、自らの力で学びます。

東京・世田谷区立桜丘中学校には、校則がありません。定期テストもなければ、宿題もありません。チャイムも鳴らなければ、教員が生徒を強い口調で叱ることもありません。ほかの中学校にある“当たり前”が、何ひとつありません。いろいろな差別やいじめもありません。あるのは、子どもたちの笑顔だけです。(中略)

「子どもは管理するものであり、教員が指示を出すもの」こういう固定観念が教員の中にあるのです。(中略)教員だから偉い。年上だから偉い。そんなことはあり得ないのです。子どもも大人も人として平等であるとともに、人権は守られなければなりません。あくまでひとりの対等な人間として、生徒と向き合う必要があります。自分の人としての「素」で勝負する、ということです。そうするためには、「教員である自分はこうであらねばならない」という鎧を脱ぎ捨てる必要があります。

西郷孝彦「校則なくした中学校 たったひとつの校長ルール」(2019.11 小学館)

CONTENTS

◇特集「教育現場に求められていること」◇

やりたいことを叶える楽校

加藤英介・・・2

「こだわり」と「専門性」で「教師の自治」を取り戻す

吉田雅直・・・4

理想を語り合える仲間がいるか?

丸小野聡暢・・・6

「教員になってから」どう学び続けるか～憧れが推進力に～

古東秀一・・・8

失敗を取り戻せる学校づくり

山口左知男・・・10

◇連載◇

「どの子ども伸ばす」を本気で考える連載 75 「意欲格差」に負けない! 公立小学校へ考える力をつけるための授業の組み立て方⑦アウトラインを示すことで考えさせる
社会科(歴史) 授業力アップ講座 ④指導法研究⑥

岡本美穂・・・13

「冬のフォーラム」講座報告

荒井賢一・・・15

今井つみ著『学力喪失』—認知心理学による回復への道筋(岩波新書)を読んで
局長・常任委員長だより

深澤英雄・・・17

学力研カレンダー

竹田有希・・・19

金井敬之・・・21

・・・23

・・・24

※久保先生の連載は、都合により休載させていただきます。

やりたいことを叶える楽校

加藤 英介

はじめに

学校に行かなくても勉強ができる時代。学校に求められていることは一人一人のやりたいことを叶えることができるかどうかではないだろうか。その思いを実現するために、教師はどのような環境設定をして支えていくのか、どのようにつなげて広げていくのが求められている。

思いを大事にするとは

教師になって13年目、4年生4クラスの学年主任をしている。4月最初の学年集会で「今年、学校でやりたいことやってみたいことはありますか。もしあればいつでも言うてくださいね。応援します。」と伝えると何人かが「お祭りがしたい・みんなで遊びたい・水族館に行きたい」などと伝えにきてくれた。その中で、一人の子が「でも、難しいですよね。できないってわかっていますけどね」と帰り際に悲しげに言ったのだ。きっと、今

まで自分の意見が通ったことや大人の都合でできなかったことが多かったのではないかと推測した。思い返して見れば、

今まで教室の中で「〇〇したい」という意見はたくさん出てきていたが、どれだけ実行できているのかと言われれば全くと言っていいほどできていない。それは、学年行事があらかじめ決まっていたり、スケジュールが埋まっていたりと、急な

変更は学年に負担をかけてしまうからだ。

仮に、学年に伝えたとしても「面倒くさい・ただでさえ忙しいのに」と思う先生もいる。だから、実現することはかなり難しかったように思う。結局子どもには「いけたらいいよね」とやさしいそうをついてごまかしながら一年を過ごしていた。今考えると、反省の一言である。

今年度は学年主任と言う立場。子どもやりたいことを叶えることを大切にしたい。学年づくり・学級づくりを進めることにした。だから、年間計画は最低限の

ものだけにして、余白を多くした。学年の先生方にも、子どもからやりたいことが出てきたときは、時間の許す限りやりましようと思えた。4月から叶えたことを紹介する。

- ・浄水場見学
- ・ごみ処理場の出前授業
- ・ハッピートーク朝礼
- ・アクアト岐阜見学会
- ・LGBTQ講演会
- ・七宝焼体験
- ・東邦ガス環境講座
- ・SDGS講座
- ・サバンナマラソン講演会
- ・キッズマネーセミナー

これらが、2学期までに行ったことである。各教科を学ぶ中で「見学したい・話が聞きたい・どんなことを考えたらできるようになるのか聞いてみたい」という子どものつぶやきを拾いながら実現したことである。特に、やんちゃな子や前向きではない子のやりたいことを実現したときには「先生、ありがとう！一生の思い出です。許可してくれた校長先生にも

ありがとうっていいたい」と他の授業も真面目に受けるようになっていた。

算数の授業でも：

やりたいことはどこかに行ったり聞いたりすることだけでない。何気なく過ごしている教室でも思いはある。特に今年度のクラスは「算数が嫌い」という子が多かった。しかし、学習していく中で、やりたくないわけではなく本当はわかりたいという気持ちもあることがわかり次のように伝えた。

「算数の授業は、わかる人だけが手をあげて発表し、進めてもよいのだろうか。それが学級目標を達成することになるのだろうか」とクラスに尋ねた。すると「わからないことが言いづらい。あつているか不安。言いたくない。」など、わからないことをそのままにせざるを得ない状況であることもわかったため「今、わからないことは恥ずかしいと言っています。が、このクラスに分からないことに対して馬鹿にしたり茶化したりする人はいますか。いるなら、この時点で宣言してお

きなさい。このクラスには間違えたり、分からなかったりしたからと言っているやなことを言う人はいません。だから、安心して分からないと喋っていいのです。言うことによつて、先生や仲間が助けてくれます。あなたのために何度も説明してくれるでしょう。それによつて、もしわかったとしたら、自分もうれしくなり、その姿を見た仲間もうれしくなります。

同じ授業をするのなら、分かる人が進める授業ではなくわからない人からスタートする授業の方が楽しいなあと思います。が、みなさんはどう思いますか。じゃあ、今日の問題が正直わからないという人はいますか。学習後、分からない人が少しでも分かってもらえるようにみんなで考えていきましょう。」

この話を終えてから、チャイムと同時に分からないと言える子どもが増えてきた。その一方で、できる子どもたちが「教え方が分からない」と悩む様子も見られた。分からないことがわかることも大切だが、それ以上に、相手を大切にすることが何よりも大切である。目の前で困っている

子がいたら支えてあげたり、わからないならわからないなりに、話を最後まで聞いたりと今の自分のベストは尽くすことができるはずである。算数の学習とは直接的には関係ないかもしれないが、根底にある心に火をつけ「やりたい」と思えるようにすることで、どの教科でも自信をもつて取り組むことができるのである。

おわりに

子どもたちのやりたいことを叶えていくためには、教師の覚悟が必要である。時間も労力もかかる。勤務の効率化とは真逆かもしれない。だが時間をかけた分だけ、子どもたちは自信をもって学習に取り組むことができるようになる。何事も粘り強く取り組めるようになる。なぜなら、やりたいことを達成するためには、最低限やらなければいけないことがあることを知っているからである。一人一人の目的が明確だからこそ、仲間と協力しながら学級目標を実現している。子どもたちの思いを叶えられる場所にするために、今日も楽しんでいきましょう。

「こだわり」と「専門性」で「教師の自治」を取り戻す

大阪 吉田雅直

今の教育現場に求められているもの（というよりも決定的に欠けているもの）、それは「教師の自治」だと思っています。いま教育現場がしんどくなってしまうているのは、子どもたちのせいでも、保護者のせいでも、管理職のせいでも、委員会のせいでもなく、他ならぬ教師自身が「教科書を教える」だけの「下請け」になってしまっていることに原因があるのではないのでしょうか。

上から次々と下ろされてくる「〇〇教育」に真面目に取り組めば取り組むほど、本当に大切なことに取り組むための時間がどんどん削られていき、余裕がなくなり、子どもたちがしんどくなっています。

「学年でそろえる」ことを重視するあまり、担任が、目の前の子どもたちの成長にとってどうしても必要だと感じていることに取り組めなくなってしまうています。

「働き方改革」という名の「手抜き」教育に

よって、子どもたちが荒れ、学級がしんどくなり、結果的に「しなくてもいいはずの仕事」を増やすことになってしまっています。

これらの問題は、すべて教師の「自治力」が弱くなってきていることに原因があると思います。では、どうすれば教育現場に「教師の自治」を取り戻すことができるのでしょうか。私は、そのためのキーワードは「こだわり」と「専門性」だと思っています。

教師には「こだわり」が必要です。こだわりがなければ、上から下りてくる「はやりもの」の教育の問題点を見抜くことができず、無批判に受け入れ、振り回され続けることになり、疲れ果ててしまいます。

私のこだわりは「どの子も伸ばす」ということです。この「こだわり」があるからこそ、どんなことが下りてきても、それは「どの子も伸ばす」という自分の「こだわり」と合致するものか、それとも相反するものか、と判

断することができません。合致するものであれば積極的に取り組むし、相反するものであれば、都合よく解釈したり、支障のない範囲で取り組む（ふりをする）などして、柔軟に対応することができるようになります。

「こだわり」というと、ひとつの考えに凝り固まった「頭のかたい人間」と思われるかもしれませんが、私はむしろ逆だと思っています。

「こだわり」とは、価値判断基準です。明確な判断基準があるからこそ、教育にとって本質的なものとそうでないもの、子どもたちの成長にとって本当に必要なものとそうでないもの、「不易」と「流行」を見分け、柔軟に対応することができるようになります。「これだけは教師として絶対にゆずれない」というこだわりを持つことこそが、教師の自由と「自治力」の源泉なのではないでしょうか。

しかし、ただ「こだわり」を「持っている」だけでは十分です。自分のこだわりにもとづいて日々実践を積み重ね、子どもたちと保護者の信頼を得ることができなければ、教育は成り立たないからです。そこで大切になってくるのが初等普通教育の専門家としての「専門性」です。初等普通教育の場である小

学校は、中学校や高校に比べて専門性が低いと思われがちです。しかし、実際は非常に高い専門性を持っています。

国語では、生まれてから「話す」「聞く」中心の世界で生きてきた幼児が文字を獲得し、「読む」「書く」という文字文化の世界へ足を踏み入れ、六年間かけて文字で情報を得て、発信できるようにするという非常に高度かつ重要な教育課題に携わっているのです。

算数も、数の概念や数量感覚など、実体験に基づく感覚の世界と数学の世界を行ったり来たりしつつ、子どもたちにしつかりとした理解(わかる)と技能(できる)を身につけさせ、それを「習熟」まで鍛え上げるという高度な専門性がなければできない教育課題を担っているのです。

この初等普通教育の専門家として専門性を自覚し、誇りと責任を持つことが、教師の自治の第一歩なのではないでしょうか。

しかし、専門性は磨き続けなければさびついてしまいます。私は、教師の専門性を維持し、鍛える方法は「実践」と「発表」しかないと思っています。

「実践」とは、目的とこだわりを持って意

識化された継続的な教育活動です。目的もこだわりも持たずに、「教科書に書いてあるから」「やれと言われたから」やっているだけの教育活動は単なる「業務」であり、「実践」とは言えません。業務を実践に高めるためにはエネルギーが必要です。しかし、そこには「できた」「わかった」「つながった」「もつとやりたい」という子どもたちのきらきら輝く笑顔があります。これが新たな実践への原動力となり、その積み重ねが教師の専門性を高めてくれるのです。この好循環が学級を安定させ、子どもたちが自信を持ち、豊かな関係でつながり、結果的に教師が「らく」になります。これこそが真の「働き方改革」なのではないでしょうか。

しかし、どんなにすぐれた実践も何らかの形で発表しなければ、「なんとなくうまくいった」というふわとした感覚だけを残して、積み上がっていくことなく、消えていってしまいます。「発表」するためには客観的な記録を取り、言語化することが必要になります。この「記録」と「言語化」が実践の質を深め、精度を高めてくれるのです。

実践の記録は、子どもたちのノートや動画

など、できるだけ「生」の一次資料の方が説得力があり、伝わりやすいです。データはクラス平均ではなく、分布の方が実態をつかみやすいです。客観的なデータを出し、グラフ化するなどして分析することで、実はできていない子がいたり、意外な子が伸びていたりと新たな発見があり自分の実践を客観視することができるので、おすすめです。

「言語化」は、実践に不可欠であるだけでなく、専門性にも関わる重要な能力です。言語化することで考えが整理されたり、「なんとなく」していたことが意識化されます。子どもたちに対しても「たよりになるのはおとなりさん」など、実践を言語化すると効果的です。実践が言語化できていると、保護者に対して、「こんな力を育てるために、こんなことに取り組んでいます」と自信をもって伝えることができ、信頼を得ることもできます。このように、「こだわり」を持って実践を続け、それを記録し、言語化し、発表する場を持つことで「専門性」を高め続けることこそが、今の教育現場に求められていることであり、楽しみながら無理なく教師を続けるための秘訣なのではないでしょうか。

理想を語り合える仲間がいるか？

丸小野 聡暢

理想を語る事ができるか

教師不足、長時間労働、教育DX、少子化、子どもたちの多様化など教育現場が抱える問題は多種多様です。近年、社会はめまぐるしく変化し、新たな学校教育が求められています。一つ一つの問題に時間をかけて丁寧に対応していくことが望ましいですが、そんな悠長なことを言っている暇はありません。全ての問題を同時並行で、高いレベルで解決することが求められます。しかも、失敗は許されません。ベテランも若手も四苦八苦しながら毎日を乗り切っているのが現状です。学校現場はブラックと叫ばれ、日々忙しさは増し、教育を行っているというより業務をこなしているという言葉がピッタリ当てはまります。ただ、教師が多忙であったことは今に始まったことではなく、以前からではないでしょうか。昔から、いじめ、不登校、学級崩壊などの

問題はありましたし、その対応へのストレスもあつたと思います。ただ、個人で解決できたり先輩に相談したりすることで対処できるような問題でした。いつからでしょうか。学校教育に信頼がなくなり、保護者が若手教師の成長を温かく見守ってくれる時代は終わり、逆に保護者がクレマー化し、要求が激しくなってきました。そのため、学校や自治体はクレームがこないように、組織的な対応という名のもと管理体制が強くなってきました。背景には、SNSの普及が影響を及ぼしている気がします。SNSがない時代は、前日に見たテレビ番組や好きなアイドル、放課後遊び、スポーツ少年団など共通の話題で子どもたちはつながっていました。教室が子どもたちのコミュニティの中心でした。しかし、現在はSNSでそれぞれの趣味でつながったり、放課後は習い事で友達と遊ばなくなったり、

教室が子どもたちにとって、コミュニティの中心ではなくなりました。それぞれがコミュニティを持ち、クラスの子どもたち同士の間が希薄になってきています。そのため、ちよつとしたことでトラブルになったり、そもそもクラスの子に興味を示さず友達関係さえ作らなくなったりしています。そのため、学校では人間関係作りやトラブル解決、放課後は保護者対応に追われている感じがします。また、授業では、主体的・対話的で深い学びによる「話す・聞く」を多く取り入れた授業が行われていますが、休み時間はトラブルを恐れ、あの子とは関わらないようにと指導があるのが現実です。教師は授業では子どもたちに主体者としてコミュニケーションを求める一方で、席替えでは、教師の偏見と親の要望でこちらが決め、限定された中でのコミュニケーションで終わっています。子どもを成長させるとか一人も見捨てないと言っていますが、言動が一致していません。また、何か起こったときに子どもたちに考えさせるのではなく、すぐに禁止事項だけを増やしていき、ますます窮屈になっていきます。

「教員になってから」「どう学び続けるか」憧れが推進力に

広島 古東 秀一

「教員になってから求められる」と

近年、教員の採用倍率は低下傾向にある。実際、文部科学省は、毎年、67都道府県・指定都市教育委員会および大阪府豊能地区教職員人事協議会による公立学校教員採用選考試験の実施状況の調査を行っているが、令和5年度採用選考の小学校倍率は過去最低の3・4倍だったと報告している。私が勤務している広島県でも倍率は2倍を下回る年が続いている。

倍率が低下していることだけを踏まえると「教員になる」ハードルは低くなっており、誰でも教員免許さえあれば簡単になれる時代になっているといえる。そうした状況に、早稲田大学の田中博之教授は、「学校現場では、受験倍率が3倍を切ると優秀な教員の割合が一気に低くなり、2倍を切ると教員全体の質に問題が出てくる」と話している。

現状、教員の数が足りない、教員の働き方など様々な問題がある中で、幅広く教員を採用することは必要なことである。しかし、田中教授が話すように教員の質を高めることも重要である。

では、こうした問題に、私ができることはなんだろうか。私にできることは、目の前の子どもたちを伸ばすこと、子どもたちに全力で関わることで、そのための力量を高めることであると考え。

私は、昨年度から教員生活をスタートしたが、最初の数ヶ月で出鼻をくじかれ、どうしようもない日々を過ごしていた。授業を考えて実践しても、子どもたちの反応は悪い。子どもたちの思いに寄り添おうとして関わるも、子どもたちはついてこない。うまくいっていない状況はわかっているが、どうしたらよいかわからない。このままでは、学級は荒れて終わってしまう状態だっ

た。

私の最初の状態は、田中教授が話す「質の悪い教員」だったのではないかと考える。教員になった喜びと、ここまで頑張ってきたプライドがある反面、それを曲げることができず、現状を打破することもできない状態だったのである。

その中で、私がまだ教員としてあり続けられる理由は、その状況を何とか打破しようともがいたからである。本を読み、学校にいる同僚の先生に指導を仰ぎ、そして、実践する。しかし、それだけではやはり限界があり、そこで踏み込んで学びに行ったのが今の学力研である。

学力研に出会い、これまで学力研で実力のある先生方が積み重ねてきた実践、多種多様な方法を知る。そして、それらを目の前にいる子どもたちに合わせて実践してみる。そして成果を振り返る。その繰り返しによって、少しずつ子どもたちが変わっていく様子が見て取れたのと同じに、自分自身の変容・成長も実感したのだ。

教員として学び続ける。このことは、教育基本法9条にも定められている通り必要

不可欠なことである。以前、同僚からこんな話を聞いたことがある。「教員になるまでは、みんな頑張るけど、重要なのは教員になってからどう頑張るか」である。

教員になるという目標に向けて、多くの人が採用試験対策や面接対策といった努力をしてきたことだろう。その一方で、教育現場に目を向けると、仕事としてこなすことに精一杯になってしまい、日々の自己を高める時間に費やすことができなくなってしまうことが多い。私も目の前の仕事をこなすことで必死になってしまっていることがある。ただ、そんな中でも自分を高めるための努力を続けること、し続けられる力が教員として求められていることなのではないだろうか。

学び続けられる推進力

みなさんには、憧れている人はいるだろうか。今の子どもたちにこの問いを投げかけると、特に男の子は大谷翔平選手と答える子が多い。

私たちの職業で考えると、憧れの先生やになりたい教師像ということである。みなさんには、そうした理想や憧れはあるだろうか。

か。そうした憧れが学ぶ推進力になるのである。

私は、「子どもたちの思いに寄り添える教師になりたい」と思っているこの職業について。しかし、先程も述べたように、1年目ですぐまうまいかな経験はたくさんした。そんなうまいかない時に、私の目指すべき指針となったのが、学力研の岡本美穂先生である。

大学院時代に、教授に良い学級があるとということで岡本美穂先生の学級を見せて頂いた。そこで見た学級の姿を見て、私自身感銘を受けた。

実際に教員になってうまくいかなかった時に、頭の片隅で思い浮かんでいたのは、岡本学級の姿である。うまくいっていない現状はあるけれど、どうにか岡本学級に近づきたい。そんな時に、改めて岡本先生がなんですごいのかを考えることにしたので。

まずは、岡本先生の本を読み、学級で実践をした。すると自分の学級の子どものたちの姿が少しずつ変わっていく様子があった。そして、もっと岡本先生のすごさを知りたいという思いで、学力研のセミナーに参加

した。そこで、岡本先生の憧れである久保齋先生、そして岡本先生の支えになっている学力研のたくさんの方や実践の存在に気付いた。そうした学んだ実践を真似して取り組む中で、以前には見られなかった子どもたちの生き生きする姿が少しずつ増えていった。

今、私は2年目であるが、今年もそうして学んだことを実践し続けている。もちろんうまくいかないことが多いが、そんな時には、また自分の憧れや理想を思い返しながら頑張ることができている。

このように、私がここまで頑張ることができているのは、憧れである岡本先生に出会ったからである。そして、憧れに留まらず、そのすごさを追求しているからである。みなさんには、憧れている人はいるだろうか。また、その憧れている人のすごさは何だろうか――。

最後に余談ではあるが、大谷選手は「憧れるのをやめましょう」という言葉を残している。大谷選手が言うように、憧れ続けた先で自分を確立するためには、憧れることをやめることも大切だと考える。

今の教育現場に求められていること — 失敗を取り戻せる学校づくり

春日井学力研 山口 左知男

今の教育現場に求められていることは何か。そして、その中で私たち教員ができることは何か。難しいテーマをいただいた。まず、そこに進む前に、そもそも学校とは何をするところなのかを考えてみたい。そして、子どもたちが求めている学校とは何なのか、我々が目指す学校とは何なのか考えを進めたい。

30年近く前、私の勤務校では、校内暴力・器物破壊が頻出し、教育荒廃が深刻だった。当時中学校にはいろいろなものがいっぱい転がっていた。教師の価値観で一方的に押しつけられた事細かな校則、明文化されていない教師間での暗黙のルール、一部教師の勝手な自己判断で多々行われる「不適切な」指導 e t c. いろいろなものでがんにがらめにするので、先生の敷いたルールに子どもたちを乗せることで学校が安定し平和になると当時の先生たちの多くは本気で考えていた。いらぬものでがんにがらめにするのに力を尽くし、肝心なことを怠っていたのだ。当時の指導は、価値観と納得の指導ではなく、力関係で屈服させる指導である。私は「力の強い」先生とよく口論したが、事態は

なかなか変わらなかった。その結果、がんにがらめの中のほころびが一つ崩れ始めると、どこまでも崩れが止まらなくなるといふ事態が深刻化していった。「力の強い」先生たちの指導が崩れ、私たちが指導の前面に立った。

それまでのやり方が通用しない中で、私たちは必死で考えた。子どもと胸倉をつかみ合いながら、次々と壊れていくトイレや廊下の壁を見ながら必死で考えた。私たちが考えた結論はこうだった。「子どもたちが求めている学校、私たちが目指すべき学校とは『安心なところ』『ちゃんと学ぶところ』『楽しむところ』『仲よくするところ』『力を合わせるところ』『プライドをつくること』」。

私たちはいらぬものは捨てた。頭髪・服装・持ち物・不要なルール e t c. 勉強と人間関係以外の学校づくりに必要のないものは捨てた。授業を成立させる、低学力生徒の学力回復、いじめ・暴力の根絶、自治能力の育成、子どもたちの要求の実現、そして、力を合わせてつかいこなす e t c. 私たちは必要なものに力を注いだ。子どもたちと手に手をとって前に

進んだ。1、2年生600人の力が結集した手作りの卒業式、子どもたちが自分たちの頭と足でつくりあげた修学旅行のダブルフリータイム・・・そうした取り組みを積み重ねる中で、子どもたちは変わり学校は1年で「再生」し「平和」になった。感動的な卒業式を終えたとき、私は求められる学校の姿に確信を持った。その後時代が変わり子どもたちも変わってきたが、今の学校で求められることも根本は変わらないのではないのかと私は考える。

冬のフォーラムで長々と「失敗」のお話をし、子どもの失敗やつまずきから学ぶ授業づくり、失敗を大事にした誰もが安心できる学級づくり、失敗から学びその中で成長する教師の自分づくりなどなど。それらを一言でまとめれば、今特に重視すべきは、「失敗を取り戻せる学校づくり」ということではないかと考える。学力研をはじめ日本の民間教育運動の中では、子どもの失敗や間違い、つまずきや分からなさを大切にしている教育実践が長年大事にされてきたが、こうした取り組みは子どもたちにとっても教師自身にとっても極めて今日的な課題と言えるのではないかと考える。そして、失敗に厳しい国日本、承認・確認・点検・怒号の国日本、効率にうるさくそれでいて国際競争力過去最低の世界37位に甘んじている国日本にとっても重要なキーワードのように思われる。

著名な作家高橋源一郎氏によると、思わぬ人間の失敗や欠陥・欠点こそ最も人間的なものであり、脅威の発達を遂げている生成AIにとっても対応できない大事な点であるとされる。なるほど、曲がったキュウリを無理矢理まっすぐに戻そうとするのではなく、そのまま伸ばしてやることこそ今大事なのかもしれない。IMD(国際経営開発研究所)の調査によると、2023・24年と国際競争力世界一、生産性・効率性世界一であった北欧デンマークでは、失敗や間違いを個人の責任にせず、みんなで分析しそこから得た経験を重視しみんなで共有するという「失敗への寛容さと信頼のコミュニケーション」がその力を培ったとされる。学校教育の中でその優れた先見性、対応力、社会性が鍛えられ、「失敗は当たり前、僕らは誰でも失敗する」が骨の髄まで染み込んでいる。信頼を基盤にした効率性の高さは、歪んだタイプによる効率性を教育現場にまで持ち込んでくるとこの国とは隔世の感がある。

自分の職場を振り返ると、私の勤める大学の学生たちは、全体的に自己肯定感が低く失敗・つまずきを非常に怖がる傾向がある。彼らは、今まであまり挫折を経験せず育ってきた「いい子」が多い。経験がないからこそ怖がる。そのため、教師という仕事にも、魅力を感じる反面不安を感じている子が多い。だからこそ、学校

ブラック化の度重なる報道の中で希望者が減っているのである。彼らを見て思うことは、そのまま教員になれば、失敗を怖がる先生になり、そこで再び失敗を怖がる子どもたちを育ててしまうのではないかという心配である。失敗への恐怖の悪循環を危惧する。そのため、授業の中では、失敗・間違い・つまずきの大切さ、失敗を大事にした授業の魅力と子どもの成長、失敗を山ほど積み重ねた私の選りすぐりの失敗談など、失敗に対する抵抗感を取り払うことを重視してきた。

ちなみにこの傾向は現場でもかなり常態化しているようである。サークルで伝え聞く話題からは、若い先生方が研究や新たな授業実践に力を注ぐというよりは、失敗せずつつがなく終わるということを何よりも大事にしているように見受けられる。授業で言うならば、習得より履修、学力の定着よりも進度を優先するという実践態度である。無論そこには、改訂するたびに実質授業時間数が増えざるを得ないという現場の苦勞が背景としてあるので、一概に責められない。しかし、できないことを子どもの自己責任として笑顔で次の単元に進んでいくという話に胸が痛む。彼らの目には失敗する子どもたち、つまずく子どもたちの姿がない。デジタル教科書などについても、今や先生だけでなく、子どもたちが自由に使えるようになってきているが、そうした操作などに若い教員が率先して取り組んでいるという話を聞くにつけ、内容は是非ではなく、人より「遅れる」こと、失敗することを嫌がる若手教員の姿に危機感を感じる。子どもたちが授業の真ん中にならない。近年デジタル先進国北欧では、デジタル端末が「集中力を削ぐ」ということを警戒し、「紙の教科書」が復活。フランス、オランダでは幼稚園・小中学校でのスマホ・タブレットなどインターネット接続機器の使用を禁止した。諸外国がデジタル端末に警鐘を鳴らしている今、我が国は躍起になって真逆の方向に突進している。そして、その中心になっているのが若手・中堅の教員たちである。

そうやって考えてみると、今求められているのは、目の前の耳当たりの言いキャッチフレーズなどに踊らされ、経産省や文科省の言いなりに学校が教師が右へ左へとふらつくのではなく、学校とは何をするとどこかを教師自身が明確にもち、私たち人間の最も人間たる所、失敗や間違い、つまずきをみんな大事にする実践に取り組み広げていくことではないかと私は考える。

「意欲格差」に負けない！公立小学校へ

事務局長 岡本 美穂

■研究発表会に向けて

金閣小学校の公開授業に参加してから18年が経った。久保先生が発表されている姿を見ながら、ただただ「すごいな」という感想を持った。その当時の私は、学校づくりよりも「学級づくり」に興味があった。どうしたら良いクラスをつくれるのか？そんなことばかり考えていた。しかし、初任校の小学校では、校長先生が3年目の私に「研修部長」の機会をくださり、20代が半分以上いる職場で、「学校づくり」に取り組むことができた。理想やビジョンがあつて実践を深めるといよりは、日々の実践をいつも評価してくださり発表の機会をくださったという感じだった。「学校全体」で何かに取り組む大事さを学ぶことができた。

2校目の小学校では、初任校で学んだ経

験をいかし、研修部長を行いながら、学年で取り組む大事さをより学ぶことができた。また板書についての本を出すことで、良くも悪くも名前を知られる機会が増えた。

3校目の小学校では、良いと思った実践は、どんどん伝えていった。すると、みんながやってみようということで、少しずつ実践が広がっていった。

私は決して器用なタイプでもないし、強い人間でもないが、人の縁をつかむ力だけはあると、このレポートをまとめながら確信した。学力研で学んだことを基盤に、さまざまな出会いがより実践を深めていくきっかけにしてください。今回の発表に向けても、たくさん先生の先生々が支えてくださった。公立小学校がここまでできるんだ、ということとは自分の今のプライドでもある。

ICTに負けるもんか、泥臭く実践をしてや

るんだ、そんな思いが根底にはある。

ただ、職場ではかなり気を遣っている。職員の様子、表情も毎回よく見ている。職場同士の人間関係も意識している。そこは、この2年ほどでより意識している。どのように「学校の組織づくり」を行っていったのかをまとめていく。

■学校づくりへの憧れ

【学力研の広場 2020年3月より抜粋】

先日、東大阪市のある学校の公開授業を参観し衝撃を受けました。それは教職員一同で「学校づくり」に取り組んでいるのが、伝わってきたからです。正直うらやましかったです。大規模校であるにも関わらず、それぞれが研鑽しながら、教師自身の成長を願い、日々の授業で子どもたちを変えようとしているのがよくわかってきたからです。校長のリーダーシップ、STFという研修の担当校ということもあるのかもしれませんが、中心の先生方何人かで一致団結して取り組んでおられるのが伝わってきました。そこで、私ももう一度、久保先生に「学

校づくり」のいろはを質問し、まとめることにした。

「自分の学校に危機感を抱いています。」

この言葉から、相談を始めました。言われたことを真面目に取り組むことのできる教師集団が自慢です。しかし、そこから教師自身の学びに向かう姿勢を求めているのは、一人では難しいものです。

それに、どんな「学校づくり」を提案すべきなのでしょう。また、先輩先生を傷つけないで「学校づくり」に関わる方法も気になったのでその部分についても相談しました。

自分自身の経験を振りかえってみても、学校を変えることはなかなかできませんが、学年は変えることができていたように思います。

理由は明確で、教育観が合わないとしんどくなる先生も多い。だから学年の先生方には理解が得られたとしても、学校全体となると難しい。学校づくりに関しては、弱い。」

と、いつ指摘もありました。

◆民主的とは

「みんなで決めたことは、一定期間やろう。」ということ。だからこそ、組織の活用を久保先生は考えるようになったことでした。例えば、研修の長でなかったとしても、国語担当を利用して提案ができる、ということなのです。

◆学力づくりで学校を変える方法

「授業改善が大きく言われているが…授業の良し悪しは、人によつて違う。」

久保先生のお言葉です。つまり「よい授業」の価値が違う。しかし、「学力づくり」は同じ観点で評価し合えるということなのです。学力研が求める「よい授業」とは、読み書き計算があったから、授業づくりがうまくいくというものです。

●漢字力

●計算力 「二つの悉皆調査で学校を変えることができます。」

【やり方】

- ① 網羅アスタの計画
- ② 採点は担当者が行う。
- ③ やり方は自由。
- ④ 年に4回行う。
- ⑤ テストは「こちらで準備」。

⑥ 研修部担当なので、「これだけは担当させてください。」と校長、研修部長に語る。

基礎と発展を意識し、実態を数値を使って見せたうえで語れるようにするそうです。

久保先生が

「習熟は瞬時にできないと意味がない。脳にドーパミンが発生。そこで終わるのでなく、それを使って次につなげる必要がある。」

と教えてくれました。習熟、基礎学力を土台にすることが、この豊かな話し合いになっているのです。と語れるように、「学校づくりに本気になって取り組む気合も入った。」

これから4年後、今回のような研究発表会を、ここに書いている校長先生と一緒に行う。まさに、ドラマのような展開だと思う。この公開授業は、今の学校の「学級づくり」の第一歩になっている。(続く)

アウトラインを示すことで考えさせる

葉祥明『三行の知恵』生き方について
『(2009.12 日本標準)を学校の図書館で
見つけて借りた。

怒ってもいい。
しかし、
恨んではいけない。

一頁ごとに書かれているのは、右のよう
に三行だけ。

そして、大抵の行は、くしていい。しか
し、くしてはいけない。という構成になっ
ている。

この本に出てくる「三行の知恵」が、道
徳授業に使えそうに思えた。

例会のための授業づくり

ところで、今年度、私は五・六年の理科
専科である。当然、道徳の授業をすること
はない。

ではなぜ、私は『三行の知恵』を読み、
道徳授業に使えそうと思ったのだろうか。

それは、常に、サークルの例会でする模
擬授業用の授業に何をしたらいいか、とい
うのを日々頻繁に考えているからだ。

教師になる前の夜間大学生の頃から、教
育系のサークルに参加していた。そんな私
にとつては、例会から例会の間の日々は、
例会に提出するレポートや模擬授業を考え
る日々だったのである。

授業プラン「中庸の是非」前編

「絵本作家であり画家であり詩人である葉
祥明さんという人が書いた『三行の知恵』
をいくつか紹介します。」

【板書】

(縦書きで三行に分けて、一行ずつ提示。)
怒ってもいい。しかし、恨んではいけない。
悩んでもいい。しかし、苦しんではいけな
い。

用心するのはいい。しかし、

「次を予想できませんか。」

- ・ びくびくしてはいけない。
- ・ 用心しすぎてはいけない。

【板書】用心するのはいい。

しかし、恐れてはいけない。

□はいい。しかし、□はいけない。

□に言葉を入れ、三行の知恵を自分で作
ってみましょう。」

(助詞の「は」の部分は、変えてもいいこ
とを伝えておく。)

できた子から、三行の一行目だけを板書
させていく。

発表するときは、その子が一行目を読ん
だら、全員で「しかし」と言わせ、その子
が三行目を読むようにさせていく。

A 「食べてもいい。」

全 「しかし、」

A 「食べすぎてはいけない。」

というように。

(※実際の授業では、他の子に三行目を予
想させていった。)

発表後、

「もう一つ、葉祥明さんの三行の知恵を紹
介します。」

【板書】 がんばってもいい。しかし、
「次を予想できませんか。」

・ がんばりすぎてはいけない。
「正解です。」

【板書】 がんばってもいい。

しかし、
がんばりすぎてはいけない。

「みなさんは、この考えに、賛成ですか。
反対ですか。どちらか選んで、理由も書
いてみましょう。」

途中で、賛成・反対の数を挙手で確認し、
数分後、賛成か反対かを明示してから理由
を発表させていく。

(※実際の授業では、教師の真ん中に身体
を向けさせて、指名なしで発表させてい
った。教師が指名せずに、発表したい子
が立ち、次々と発表していく。同時に立
った場合、目で譲り合うようにさせた。)

アウトラインを示して考えさせる

授業プラン「中庸の是非」を五年の理科
授業で行った。

「理科に関係あります。」

と言いながら、「三行の智慧」を作らせた。
いくつか紹介する。

【子どもたちの三行の智慧】

- ① おこつてもいい。しかし、ぼうりよくを
ふるつてはいけない。
 - ② よふかししてもいい。しかし、ねぼうし
てはいけない。
 - ③ よろこんでもいい。しかし、ちように
のつてはいけない。
 - ④ じまんしてもいい。しかし、あおつては
いけない。
 - ⑤ 楽しんでもいい。しかし、はしやぎすぎ
てはいけない。
 - ⑥ きらつてもいい。しかし、やらないのは
いけない。
 - ⑦ かわいがるのはいいい。しかし、あまやか
すのはいけない。
 - ⑧ 失敗はいい。しかし、二度目はいけない。
 - ⑨ 悪口を心の中で言うのはいいい。しかし、
口で言うのはいけない。
 - ⑩ なやむのはいいい。しかし、死を選んで
はいけない。
 - ⑪ たよつてもいい。しかし、全部まかせて
はいけない。
 - ⑫ かなしむのはいいい。しかし、ひきずつて
はいけない。
 - ⑬ 軟球はいい。しかし、硬球はいけない。
 - ⑭ お金をつかうのはいいい。しかし、後のこ
とを考えなければいけない。
 - ⑮ 考えがしっかりと強いのはいい。しかし、
他人の意見をきかないのはいけない。
 - ⑯ しよう来に夢を持つてもいい。しかし、
それに伴う努力をしなくてはいけない。
 - ⑰ 生き物を飼うのはいいい。しかし、責任も
もたなければならぬ。
 - ⑱ 集中するのはいい。しかし、周りが見え
ていないのはいけない。
 - ⑲ てい案するのはいい。しかし、おしつけ
てはいけない。
 - ⑳ ほれるのはいいい。しかし、おれにほれる
のはだめ。
- 五年生であっても、これぐらい含蓄のあ
る三行を考えることができるのである。
なぜ、できるのかといえは、
□ はいい。しかし、□ はいけない。
というアウトラインがあるからだ。
「何でも自由に考えなさい。」
と言われると、逆に迷って、何も考えつけ
なくなってしまう。
考えるためのアウトラインを示すこと
で、考えやすくなるのである。

指導法研究⑥

学力研常任委員 深沢 英雄

一、子どもの発言への対応

十二月五日、木曜日に教職大学院の学生への模擬授業を行いました。今年で9年目になります。社会科六年生の歴史教材を取りあげて模擬授業と講義を実施してきました。

今年、日本文教出版のP158、159の「発達した都市と産業」を取りあげました。その講義を受けた学生の感想より、子どもの発言への対応についての部分を紹介します。

『授業中においては**子ども達のつぶやきを拾う事**を意識していきたい。子ども達の素朴な話などを拾い上げ、授業に組み込み、先生からの気づきではなく、**友達の気づきとすること**で内容に親近感が湧きより授業に熱中することができる。また、自身のつぶやきも拾ってもらう事は承認されたこと

と同値であると考えるので、嬉しくなり取り組み度合いも増すことが期待される。』

『私はこの講義を受けて**子ども**の動きを重視した授業だと感じた。常に子どもたちに問いかけ、考えさせることで**たくさん**のことに疑問を抱かせ、それを解決しようとしていた。教師が**一方的**に何かを教えるのではなく、**子どもたちが自分から答えを導きだそうと促すこと**で、子どもたちが**主体**で教師はそれを支える役割として授業を行っている印象を受けた。』

『授業中には深澤先生は発表してくれた人に対しとても褒めていた。それも一人に集中して褒めるのではなく、時には学級全体のことも褒めていた。』

『良い発言をした際に拍手の時間を取り入れることで、一度場をリセットされたように感じました。この時間で他の生徒は発言をした生徒の意見に耳を傾けようとして

おり、私も実践してみたい技術だと思えました。』

『教師の姿勢として、児童の挑戦を後押しし、**学ぶ姿勢をしっかりと評価する**場面が多くあった。例えば、児童が発表している際に、発表を聴いている児童らが反応するとそれに対して、「いい反応やわ」と自然な児童の姿を価値づけることが意識されていた。そのため、授業全体を通してどんな発言をしても**しっかりと受け止めてくれる教師の姿**があり児童らにとっても間違っても大丈夫という空間になっていたと考える。それによって、**児童らが互いに学び合う**ことができ、授業を楽しむことができ、そのような土台づくりが大切だと学んだ。』

『教材に対する熱量を感じ取ることができた。まず入念に準備することで**教員が喋りたい、教えたいという気持ち**を子ども達に雰囲気として伝えることができるが、大きな鍵となってくると考える。今回の授業ではそれを感じ取ることができた。一方で、**喋りたいという欲が強くなってくると子ども達を置き去りにしてしまう可能性**があるが、それは発問を通して興味を引き付け、

子ども達も同じ早さで学習に参加させることで補っていた。授業のスキルをうまく組み合わせることで、授業に引き付けることができ、先生だけが先々に行かず、子ども達も巻き込んで授業を行うことができると感じた。そこで、始めの予習してきたものを子ども達に発表させることにより、子ども達が主体であるという構造のもと授業が展開されやすくなるのではないかと感じた。

二、子どもへの細かな指導・教科書(図・資料など)をどう使うか

『教科書の図に意識を持たせるということです。社会では図や絵が他の教科よりも多い教科です。教科書に書かれている文章と絵をしっかりと結びつけることが一番わかりやすい説明になるのだと授業を受けて感じました。私の専門である数学では、図形や関数といった集中的に図が出てくる単元があります。それらを見て、仕組みがどのようなになっているのか、意味を考えることは必要な学習です。特に既習に戻ることとその既習との違いを比較することが、図

や絵を活用する最大のメリットだと感じました。』

『最も印象に残り、自身の学びになったと感じたことは、「資料の提示の仕方」についてです。深澤先生の授業では、小さい図は拡大し、場面に合わせて必要な部分のみを切り取って子どもたちに提示していたり、図の中でも線を引いたり、○で囲んだりし、注目してほしいポイントを分かりやすく示すなどの工夫が見られました。このような工夫は、余計な情報に目がいくことを防ぎ、授業の流れや内容を頭に入ってきてやすくしているのだと考えました。』

『拡大コピーを見ながら更なる気付きを引き出すことは、班ごとに異なる作業のスピードを調整することにもつながると感じました。また、皆で同じ資料を見ることができると、資料のどこの部分について話しているかが分かりやすい。そうしたいいろいろなメリットが見込まれるために、教科書では小さく掲載されているが、教材研究の中で読み取り甲斐があると判断した資料は、拡大コピーを用意しておくとういと学んだ。』

最近の社会の教科書は、大きな資料が掲載されているが、細部を見て、考えさせるには、まだまだ小さすぎます。この講義では、この2つを大きく拡大して班に一枚配りました。よごれたり、しわにならないように、ラミネート加工をすると便利です。



①にぎわう天福の港のようす 前線の賑が並び、品物を積んだ船でにぎわっています。



②江戸時代のおもな特産物と交通 五街道は、江戸と主要な都市を結び道です。移動交代の大名や商人のゆきせで承えました。

今回の講座のテーマは、「教師であり続けるために」ということで、若手からベテランの六人の先生方にお話していただきました。

【教師の力量形成 教師であり続けるために 古東先生】

「あなたが憧れている人はいますか？」子どもの想いに寄り添える先生でありたいと思っているが、「うまくいかない」「どうしたら良いのか」と悩む日々。そんな時に変われたのは、憧れである岡本美穂先生の存在があったから。うまくいかない時に、理想とする憧れの姿をイメージし、近づくために本を読み、セミナーに参加し、憧れの人の方法を取り入れていった。本で読んだことから自分の学級を振り返り、学んだ学力研の取り組みをとにかく自分の学級でやってみる。理想と憧れを持って学び続ける、初心に帰り自分を見直すことの大切さを感じる報告であった。

【教師の力量形成 ゴールを意識した学級・授業づくり 福島先生】

教師の力量形成とは、経験年数は関係なく、それぞれの先生がどう取り組むかが大切なのではないだろうか。日々、どんなことを大切にしていくだろうか。

自己分析の手法として大谷翔平選手が使ったことで有名なマンダラチャートを取り入れている。自分のクラスを振り返って、三月にどんな姿になってほしいかをイメージして中心を書く。そのために、どうやって進めていくかを、どんなことをしていくかを周りに書く。学級でも、どうなりたいか、目標を明確にするために使うこともできる。大切にしたいことを明確にもち、授業に向かうためのウォーミングアップやクラス会議、集会等の取り組みを行い、高めあいつながるクラスづくりを目指している。

【教師教育の復権 宮本先生】

枚方市の学校に貼られているポスターから「子どもが主役の学校へ」反対か？賛成か？

学校は、学力づくり、仲間づくりを行う場である。しかし、コロナ禍を経て、高学年であっても、自分の意見ばかり主張する、我慢ができない、食べ物の好き嫌が多い等、一言で言ってしまうえば、わがままな子が増えているのではないか。そんな子ども達には、教師という強いボスが必要である。久保先生のいう強いボス猿である。ボスとしてクラスの流れを作り、見守る。指導と評価の腕を磨かなくてはならない。子どもに任せるだけでは成長はしない。教師が教えることは、しっかりと教えることが大切だ。

また、子ども達の言葉を増やすため、新出漢字の学習で、熟語、類義語などを調べさせる。漢字テストでは、調べたことをプラスで書いたことも得点し評価する。

【教師教育の復権 荒井先生】

教師教育は大学、大学院、現場でなどなされるが、荒井先生は、どんなことに取り組んできたのだろうか。荒井先生は、大学の頃か

ら学びが始まっている。①授業記録を読む
②教師向けの講座に参加する③論文（レポート）を書く④サークルの例会に参加する
⑤サークルの代表になって運営⑥講座を企画⑦実践を本にする等。

そんな教師には、権能がある。どのように指導するかは、指導者の裁量に任されている。自分の構想を大切にすべきである。荒井先生は、現在、理科を教えているが、各クラスによって理科の時間でも時間差があることもあり、「三行の知恵」を使った討論の学習を行っている。型を示し、子ども達に作らせ、それに対して賛成か反対か考えさせる。その際、両方の立場から考えさせ、両方から考えることを大切にしている。

今は、指導する内容が簡単になってきている。教師の権能として、もっと難しいことを教えてみるのもいいのではないか。

【現在の教育への提言 山口先生】

「失敗について」

失敗し放題、失敗してもニコニコ、そんなクラスを目指したい。

山口先生が久しぶりに熱中したドラマ「宙わたる教室」、そのドラマのように、子

ども達が一つのものに熱中して、つながっていく教室でありたい、と語られた。山口先生が大学の教員をしていて感じることは、失敗、つまづきをこわがる学生が多いこと。それに加え、教員のブラック化（給得法等）により教員志望者が減ってきている。そんな学生に、山口先生は、自身の経験を語りながら、「失敗は怖くない」というメッセージを送っている。

失敗と信頼がつくる「競争力」。デンマークから学ぶ。デンマークの高い生産性のカギは、「失敗や間違いについての考え方」、進んだ効率化のカギは、「信頼に基づいたコミュニケーション」である。日本は、それを学校でも育てるためにも、「失敗」を最大限、大切にしなければならぬ。

【現在の教育への提言 久保先生】

「デジタル荒れが来る前に、子どもと保護者と先生でつくるコモンとしての教育づくり」

デジタル荒れは、すでに始まっている!! 外には飛び出していないが、荒れは始まってきている。荒れを防ぐためにも、そのクラスに合った、最適化した授業をする。教師が

工夫する自由があるということが大切である。今の教師には権能がない。今は、足並みを揃えることに敏感になりすぎて、自由が与えられていない。単に揃えるのではなく、「漢字で高いところを目指す」等、高いところで共通の意識をもち、取り組みに関しては、それぞれがクラスに合ったものを工夫すること。これが、教師の喜びだ。

また、教育活動には、保護者が大切。そのために、学級通信の自由も必要だ。

宿題にしても何にしても保護者との関係で成り立っているのである。学級は、子どもと保護者と先生の共有物、共有財産である。三者が納得すれば、ものすごくよくなるものだ。どこかがよくなると、よくなるはない。

教師の権能を維持するためにも、保護者の理解は必須だ。保護者の理解を得、それぞれの教師が工夫できることが大切である。そこから教師の学び合いが生まれるのである。

今井むつみ著『学力喪失』―認知心理学による回復への道筋(岩波新書)を読んで

金井 敬之

子どもの学力喪失はおとなの責任

タイトルの「学力喪失」とは、「学力低下」の言い換えではなく、「子どもたちが本来もっている学ぶ力(学力)が、おとなの誤解や表面的な指導で喪失させられている」という意味である。つまり、責任はおとなにあるという主張である。今井氏は言語獲得の過程をみても、子ども自らの学ぶ力が学齢期にその力が十全に発揮できないのは、おとなの誤った知識観や教育観のせいだという。逆にいえば、おとなの力で子どもたちの学ぶ力を取り戻せると主張する。

おとなの主な誤った知識観や教育観は以下の3点である。

- ・学力テストや標準テストの点数を上げる
- ・ことが学力をつけることだ
- ・情報の記憶が知識だ
- ・わかりやすく何度も教えれば理解できる

「たつじんテスト」で明らかにされたこと

今井氏を中心とする7人のグループは、広島県教育委員会の要請で「学びの基盤に関する調査」のために「たつじんテスト」を作成した。

「たつじんテスト」とは、各教科で学習した内容の習熟度を測るものではなく、小学校低学年でも解けるレベルで、教科の学びに必要なスキーマ(経験や環境から構造化された知識の集合体のこと。黄色の細長い果物でバナナを連想できるのはスキーマが形成されたから)と、行間を埋める力、推論を行う力、情報を統合する力などの思考力、認知能力を測るテストである。そのため小学校も中学生も同じ問題を解ける。

この「たつじんテスト」で明らかにされたことは以下の4点である。

- ・誤ったスキーマを修正できない

・行間を埋められない

・メタ認知が働かず、答えのモニタリングができない

・数やことばの概念が理解できていない
スキーマとメタ認知

子どもたちは学習の過程でスキーマを形成する。かけ算すると答えは大きくなり、ひき算すると答えは小さくなるというスキーマが、5年生の小数のかけ算、わり算の学習で、そのスキーマを修正しなければならぬ。言い換えれば、学習することは自分のスキーマを修正していく作業である。

子どもたちのスキーマを修正するために、授業があるのだが、教師からの一歩的な教授では、子どもたちは自分のまちがったスキーマに合致しないとスルーするか、自分のスキーマに合うようにねじ曲げてしまう。行間を埋められないことで文章を理解できない子が多いという。読むことは自分のスキーマで行間を埋めながら書いてあることの意味を解釈し、自分の視点から離れ他者の視点で世界をとらえることである。国語も算数の文章題も解けないのは、この行間を埋められないことが原因である。

自分の答えをチェックする機能がメタ認知である。ひき算なのに答えが問題文の数より大きくなったなど、どうもこの答えはおかしいと思えることがメタ認知である。数や時間、分数の概念が理解できていないことも明らかになった。

学力格差の正体

さらに、たつじんテストの正答率を学力テストの上位群、中位群、下位群に分けて分析すると、上位群の子の正答率は中学年、高学年、中学生ともおしなべて高い。中位群の子の正答率は、中学年、高学年、中学生と学年が上がるにつれて上位群に追いついている。しかし、下位群の子の正答率は、中学年、高学年、中学生と学年が上がっても上昇が少ないのである。つまり、小学生で学習が苦手な子は、中学生になってもスキーマもメタ認知も向上しないし概念も身につかないのである。

そのような子どもたちの実態で、学力テストの過去問をくり返して平均点が数点アップしたとしても、それは中位群の子の点数がアップしたのであって、下位群の子の点数は上がっていないと言える。つまり、

下位群の子の学力が向上せず学力格差がさらに広がるのである。学校現場で子どもたちの学力格差がさらに広がっているという教師の実感には正しいと思う。

記号接地と教師にできること

知識をスキーマやメタ認知などを駆使し身体感覚や経験をつなげ概念を形成することを「記号接地」という。元々はAI関連の用語である。

子どもたちが学習内容を理解できないのは記号接地ができていないからだ。誤ったスキーマを修正することは、記号接地をしないことである。それは、おとながまちがいを指摘しても簡単に修正されない（スルーするか都合のよく解釈してしまう）。子どもが多くは生活経験や学びから概念を紐づけし、メタ認知を高め自らスキーマを修正して記号接地をしていくことが重要である。記号接地の最初は幼少期の遊びである。それはまさに学力研がいう「見えない学力」を育てることではないか。

記号接地を助けるためには、プレイフル・ラーニングを提唱している。プレイフル・ラーニングとは、「遊びから学び」「学

びが遊びになる」ことである。この本では、浜松の鈴木先生が紹介されていた「時計カルタ」「分数のたつじんトラップ」を報告している。さらに、先生から教えてもらおう授業から「先生や友だちといっしょに学ぶ」授業の重要性を指摘している。みんなが話し合うことで自分がわかっていたと思っていたことが、実はほんとうの意味でわかっていなかったことに気づける。「わからん」といい続ける子どもがいることでクラスが活性化するという。それは「個別最適化学習」とは対極である。

教師にできることは、問題が解けた、答えが合っていたというだけでなく、意味がわかったという学習の前提となる概念が習得されているか、誤ったスキーマをもっていないかを確認すること、もしそれができていなかったら、基本概念まで戻るべきだということ。それは、概念に接地できないと中学生になっても概念形成ができないまままで成績も伸びないからだ。

「学力喪失」を読んで「見えない学力」「みんなが学ぶ」という学力研のキーワードが想起できることは興味深い。

局長だより 1月

◇学力研最新情報

●今年こそ、200名の大会を

コロナ禍で、夏の全国フォーラムを中止して以来、なかなか対面の学習会を開くことができず、苦しんだ学力研ですが、ようやく、以前のように完全対面で200名参加を目標に、夏の全国フォーラムを開くことにしました。

というのも、子どもたちの実態や、先生方の実態が、あまりにもたいへんで、全国津々浦々で喘いでいる声が聞こえてくるからです。学力研は「すべての子どもに確かで、豊かな学力を」をスローガンにしています。これは、結成当時から全くぶれることなく、50年近く、保ち続けてきたものでもあります。

●CBT化で何がわかるのか

ICTの導入で、教師の評価する権利そのものが奪われているという地域も出てきています。2025年4月予定の全国学力テストが、CBT化(コンピュータ使用型調査)されるにともなって、評

価そのものも指導する教師の手をすり抜けて、結果だけが集約されるようになっています。

●日々の成長は評価できない

日々成長し、変容していくのが子どもです。ちよつとした声かけや、きつかけ、学力づくり実践によって、大きく力を伸ばしたり、一気に大人びた姿を見せるようになったりすることは、日々ともに過ごしているからこそ、気がつくことです。

その機会をとらえて、奨励したり、激賞したりしながら、成長を促していくのが、私たち教師の仕事の醍醐味であるはず。ブラツクだの、やりがい搾取だの、さんざん言われようとしている「教員」という仕事ですが、学力実践のいくつかを取り入れることによって、その徒労感はかなり軽くなるはず。

今年の全国フォーラムに、苦しんでいる先生方をお誘いして、ひとりでも多くの方に、学力研のファンになっていただきたいです。

◇事務局だより 岡本 美穂
12月22日(日)

冬のフォーラム

久しぶりの対面講座でした。熱い思いが語られ合った素晴らしい会だったというご感想もいただきました。



●第18期先生のための学校

●次回は1月18日(土)
会場(たかつガーデン)

会場費:2,000円

講座1「できる、分かる つなぐ」
安心して子どもが「書きたい」と思える授業のために

根無 信行

講座2「教材解釈 授業実践」

学びをつなげる

社会科授業づくり

加藤 英介

講座3「学級活動や学級会など自治を育てる取り組み」

講話 学校長 久保 齋

<https://www.kokuchpro.com/event/5713995fe1b0c5a47dc91be44d9ae924f/>

●2月8日(土)オンライン
ZOOM 無料

<https://www.kokuchpro.com/event/9d77ae09ace6017c3ba57e8766d4af4c/>

18年目を迎える「先生のための学校」です。18年続くには意味があります。ぜひ、ご参加ください。お待ちしております。

■学力研春の大分集会 新年度スタート講座IN大分開催決定
3月30日(日)

学力研の豪華講師陣が、大分に「新年度の学級づくり・授業づくり・学力づくりをどう進めればいいのか、ズバリ伝授。」
どの子もキラキラと輝かせるために学び合います。

学力研カレンダー



《各地のサークル・部会 2025年 1月 例会、イベント》

どなたでもご参加いただけます。お誘い合わせのうえお越しください。お待ちしております。

※会場等使用状況により、変更の可能性もありますことをご了承ください。

1/

25 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

25 (土) みなみ学力研 9時半～12時 阿倍野区民センター 図書 nobu580701@yahoo.co.jp

2/

7 (金) 伊丹学力研 18時半～ ※阪急武庫之荘駅近く 前田 090-9715-3830

22 (土) 大阪教育サークルはやし 午後 エルおおさか 荒井 aik28501@bca.bai.ne.jp

オンライン開催のサークルには、参加方法を連絡先にお尋ねください。

下記サークルも活動していますので、翌月以降の日程のお尋ね等のご連絡下さい。

- いろえんぴつ (加印) 18時半～ 稲美町ふれあい交流館 岸本 090-9117-6330
- 春日井学力研 18時半～ レディヤン春日井(JR勝川駅) 山口 080-6904-1697
- 持ち方書き方研究会 ライン会議で行います。日時や参加のしかたはご連絡を 前田 090-9715-3830

《全国キャラバン等 今後の予定》

- 学力研・春の地域集会 3月30日(日) 9時15分～15時45分

会場：ホルトホール大分201号(最寄り：大分駅)

「新学期スタート講座(1年間の学級づくり・授業づくりを見通す)」

講師：久保齋 岡本美穂 荒井賢一 参加費2000円

- 学力研・先生のための学校【全6回】

8月25日(日) 13時半～16時【済】 9月14日(土) 13時半～16時【済】

10月12日(土) 13時半～16時【済】 11月9日(土) 13時半～16時【済】

2025年 1月18日(土) 13時半～16時 2月8日(土) 13時半～16時

対面講座：8月(エルおおさか)・10月・1月(たかつガーデン)

(詳細はメルマガ「まぐまぐ」、「こくちーず」などで)

(講師派遣希望、サークル情報などは 事務局へ 079-426-5133)

ご意見・ご感想は下記まで

荒井 賢一 E-mail aik28501@bca.bai.ne.jp

李 詩愛 E-mail iwamotoshie@gmail.com

堀井 克也 E-mail katsuya4k1h9@gmail.com